

# 訪問リポート

鳥取大学は、実学を中心に地域とともに歩み、世界へ展開し広く社会に貢献することをミッションにしている。「知と実践の融合」を高く掲げており、産学協創体制をきっちり構築している。

は、2023年に設置された組織的産学連携に関する企画・立案・プロジェクト運営を実行する組織である。

## 鳥取大学とつとりNEXTYイノベーションアジアタイプ

は、鳥取砂丘の研究をメインとする鳥取大学乾燥地研究センターがあることだ。米子キャンパスには、医学部、附属病院、染色体工学研究センターとつとり創薬実証センター

例はあった。21年には鳥取大学とタイキンの間で10年10億円規模の長期大型の組織対組織の包括連携が締結された。同じ年には、鳥取大学と米子カスの間と同様の連携がな

命教授)である。藤井氏は大阪府豊中市に生まれ、北野高校を出て東京大学、東京大学大学院で電気、電子を学ぶ。テーマはトランジスタのトンネル効果であり、その後、

硫化ガリウム系半導体の分子線エピタキシー技術などは、かなり実用レベルまでできている。また、ワイドバンドギャップ(WBG)半導体に関する基礎的研究も進んでおり、光デバイス、光触媒なども面白い(藤井氏)。

を引き出す燃料電池の研究などが注目されるだろう。こうした様々な成果を東京、大阪などの大都市エリアに拠点を構える有力企業との連携につなげていきたいと切に思っている。

とつとりNEXTYイノベーションアジアタイプ(TNII)

# 組織的産学連携を推進

## WBG半導体の研究も進展

織である。

鳥取大学は県下No.1の大学であり、農学部、工学部、地域学部、医学部などをあ

1がある。そしてTNIIという組織が誕生し、強烈に鳥取大学の「知」と企業をつなぐ成果を生み出すべく全力を挙げている。

された。そして、いよいよ世界的なブームになっている半導体分野の研究と企業との間をつなぐ必然性が出てきている。

総務省において情報通信政策の仕事に携わり、情報通信研究機構ではオープンイノベーションの統括ポストの任にあった。

いるチームでは、内視鏡やカテーテルなどを細径でありながら、高機能、多機能化し、次世代型の低侵襲医療デバイスも開発している。

持統的な組織的/産官学研究イノベーションの創出に全力を挙げる鳥取大学のTNIIの活動には、国内外から非常に多くの注目が集まってきている。



藤井氏(左)と田島氏

0人。地域性を感じると「このTNII設立前にも組織的包括連携の事

Iにあつてサステイナブル戦略本部の統括クリエイティブマネージャーの任にある藤井啓造氏(特

取大学の研究には、目を見張るものもかなりある。硫化物系半導体、ZnO、ZnS、ZnSe、

「かなりユニークな開発としては、ドローンを用いて被災地の地図を作る研究、水素エネルギー

は、国内外から非常に多くの注目が集まってきている。(特別編集委員 泉谷渉)